

論文

インペアメントがディスアビリティに先行するのか

——インペアメントとディスアビリティの個人化をめぐる——

北 島 加奈子*

1 はじめに

英国の障害の社会モデル (British Social Model of Disability) (以下、社会モデル) の議論においては、インペアメントがディスアビリティに先行するという主張と先行しないという主張がある。前者の立場を取るのは、「隔離に反対する身体障害者同盟」(Union of Physically Impaired Against Segregation: UPIAS 1976) やマイケル・オリバー (1996、1999、2009)、トム・シェイクスピア (1992、[2006] 2014) および、シェイクスピアとニコラス・ワトソン (Shakespeare and Watson 2001) などである。反対に、後者の立場を取るのは、バリー・アレン (1999、[2005] 2015)¹ やシェリー・トレメイン (2001、2002、2015、2017、2018) のほかに、日本では星加良司 (2007) がいる²。

本稿は後者の立場から、インペアメントがディスアビリティに先行するという主張が、インペアメント、ひいてはディスアビリティを個人化していることを指摘する。他方、インペアメントはディスアビリティに先行するものではないという主張に対しては、身体の位置づけをめぐる批判がなされることが多い。それを踏まえた上でなお、トレメインの主張³にどのような妥当性があるのかということをも明らかにする。

2 UPIAS、オリバー、シェイクスピア

まず、社会モデル論を代表する UPIAS、オリバー、シェイクスピアの主張を取り上げる。この三者はインペアメントを、ディスアビリティに先立つものと考えているが、インペアメントとディスアビリティのそれぞれをいかなるものと見なしているのか、あらためて確認しておく。

社会モデルの原型を示したとされている UPIAS は、明確にインペアメントとディスアビリティを区別し、以下のように記している。

ディスアビリティに対するわれわれの立場は、とてもはっきりしている。……社会は、身体的なインペアメントのある人々を無力にする (disable)。ディスアビリティとは、われわれが不必要に孤立させられ、完全な社会参加から排除されるというやり方で、われわれのインペアメントの上に押しつけられる何かである。……われわれはインペアメントを、四肢の一部欠損あるいは全欠損、または四肢の欠損、身体の組織や機能の欠陥と定義する。そしてディスアビリティを、身体的なインペアメントのある人々のことを全くあるいはほとんど考慮せず、彼らを社会的活動の主流から排除する、現代の社会組織が生み出す不利益や活動の制限と定義づける。……身体的なディスアビリティは、社会的抑圧の形をとる (UPIAS 1976: 14)。

UPIAS にとって、ディスアビリティとは「われわれのインペアメントの上に押しつけられる何かである」から、

キーワード：障害の社会モデル、インペアメント、ディスアビリティ、個人化

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2015年度3年次転入学 生命領域

明らかにインペアメントがディスアビリティに先立つのである。また、これはシェイクスピアとの違いになるが、UPIASはインペアメントを身体的なものであると見ている。そして、ディスアビリティを社会が生み出す不利益や活動の制限であり、さらに社会的な抑圧であると捉えている。UPIASはインペアメントが原因や理由となってディスアビリティが引き起こされるとする因果関係を否定して、ディスアビリティがインペアメントのある人々に社会の中で降りかかってくる結果や問題であると捉えるのである。星加によるなら、UPIASは、障害についての従来の「個人モデル」から新たな「社会モデル」へ移行することによって、「障害問題の焦点をインペアメントからディスアビリティに移行させた」のである（星加 2007: 38）。

オリバーは、インペアメントとディスアビリティの定義について、基本的にUPIASのそれを踏襲している⁴。それはUPIASが示した『『障害の基本原則 (Fundamental Principles of Disability)』』によって、自らの経験を再考するようになったからである（Oliver 2009: 41）。したがってオリバーによれば、「インペアメントは、物理的な身体の説明に過ぎず……、無力化 (disablement) は身体と何の関係もない」のである（Oliver 1996: 35）。そして、インペアメントを個人の身体に属するものと捉え、ディスアビリティをインペアメントのある人々と社会との関係によって生じるものであると見ている。さらにオリバーは、障害者の定義のうちに、「インペアメントをもっており、それゆえ抑圧を経験する」ということを挙げている（Oliver 1999: 2）。

オリバーは、ディスアビリティの経験としての被社会的抑圧の経験はインペアメントがあるためであると捉えており、その意味で、UPIASと同じくインペアメントはディスアビリティに先行するものと捉えているのである。

社会モデルに対してはそれがインペアメントを軽視しているという批判が出されてきたが（Morris 1991; Crow 1996 等）、オリバーによるならば、そもそも「社会モデルはインペアメントの個人的制限を論じるものではなく、ディスアビリティの社会的障壁を論じるものである」（Oliver 1996: 38）。さらには、「社会モデルはインペアメントの個人的経験ではなく、無力化の共通の経験を論じるものである」。したがって、「この批判は概念的な誤解がもとになっている」のだと主張する（Oliver 2009: 48）。他方で、オリバーは、「車椅子の白人男性は、インペアメントが与えた制限を認識している」から（Oliver 2009: 48）、「私の研究がインペアメントを無視しているという主張は誤りである」とも述べている（Oliver 2009: 27）⁵。オリバーの主張がインペアメントを無視したことになるか否かについての論議は別として、オリバーがインペアメントとディスアビリティを明確に区別していることは確かである。

他方、シェイクスピアは人々が無力化される (disabled) のは、社会的障壁とその身体の両方によってであるとする（Shakespeare and Watson 2001: 15）。また、シェイクスピアは「インペアメントは社会的関係を無力化するという観点からのみ捉えることができるものである」（Shakespeare and Watson 2001: 16）としており、インペアメントを単に身体的なものであるとは見なしていないことが分かる。これは、オリバーとの違いの一つである。さらにシェイクスピアは、「インペアメントはディスアビリティの原因や引き金になり、ディスアビリティそのものがインペアメントを生み出し、悪化させるかもしれない」（Shakespeare and Watson 2001: 17）として、両者が相互に作用する関係だと捉えている。加えてもう一つ、オリバーの議論と異なる点として、シェイクスピアはインペアメントとディスアビリティを明確に二分できるものではないと主張していることが挙げられる（Shakespeare and Watson 2001: 24）。

シェイクスピアによれば、インペアメントは、決して単に生物学的なものではなく、社会的文脈によって作られ、決定され理解されるものである（Shakespeare 2004: 16）。ところが、そう主張する一方で、「身体や脳のインペアメントは現実であり、それらの多くは病的である」と述べ、「インペアメントの予防は望ましい」とも述べているのである（Shakespeare 2004: 18）。よって、シェイクスピアはインペアメントの社会的被構築性を認めながらも、生物学的あるいは身体的なインペアメントという存在を想定していると言えるだろう。

シモン・ウィリアムズは「ディスアビリティとは……身体的なインペアメントがもつ生物学的な現実や構造的な条件 (制約) が、社会的・文化的な相互作用……によって現れる特性である」（Williams 1999: 810）と述べているが、シェイクスピアは「その視点は、実際に使用できるようなディスアビリティの理解を精緻化するための良い基盤を提供する」と評価している（Shakespeare [2006] 2014: 74）。その上で、シェイクスピアは、「インペアメントは、ディスアビリティをもたらす問題の複雑な相互作用に必要不可欠な要因ではあるが十分ではない。……人々が無力化されるのは、社会と自らの身体によってである」（Shakespeare [2006] 2014: 75）とする。シェイクスピアは、ディ

スアビリティがインペアメントによってのみ生じるものではないとくり返し主張し、このことを「もしあなたが歩けるなら、階段は概して問題ではない」のだから、「無力化する障壁は、まずインペアメントのあるところに現れる」(Shakespeare [2006] 2014: 22) という説明の仕方をする。すなわち、シェイクスピアは、ディスアビリティはインペアメントと社会的な環境との相互作用によって生じると主張するのだが、実際は、人々を無力化するその環境に先立つような、個々人のインペアメントを前提にしているのである。

3 ディスアビリティ化されたインペアメント

3.1 アプリオリなインペアメント

UPIAS、オリバー、シェイクスピアのように、インペアメントを前提にしたディスアビリティの議論は分かりやすいとも言える。だが、そこには大きな見落としもあると筆者は考える。星加は、UPIAS やオリバーの定義について、「ディスアビリティがインペアメントのある人の問題であることが示され」ていると指摘する(星加 2007: 108)。すなわち、シェイクスピアも含め、インペアメントがディスアビリティに先行すると論じる者にとって、「ディスアビリティとは、インペアメントのある人の問題」なのである。言い換えるなら、そのように主張する論者は「インペアメントがない人にとっては、ディスアビリティは関係のない問題」だと捉えているとも言える。

何らかのディスアビリティがあり、それに関わる契機としてインペアメントが「あるらしい」「あるはずだ」とされることがある。社会内になされる、この関連づけは不確かである。だが、関連づけの不確かな思考や行為のあり方が重要であり、それがどのような事情によってなされ、どのような効果を及ぼすのかという社会的事態を捉えるべきだと立岩真也は言う(立岩 2017: 25-26)。この主張に筆者は賛同する。ディスアビリティとインペアメントの関係性は、社会内で定められるものであり、揺れ動くのである。それに対し、UPIAS やオリバーらの議論では、ディスアビリティにインペアメントが必然的に関連づけられている点が問題なのである。

トレメインによれば、「社会モデルは暗黙の前提として、インペアメントをディスアビリティの必要条件とした」⁶ために、インペアメントとディスアビリティがともに個人化されて構築される関係性を断ち切れていないのである(Tremain 2001: 630, 2017: 92)。社会モデルは、個人的なインペアメントの存在や経験の意義を認めても⁷、「個人的なディスアビリティ」という考え方は否定する。それにもかかわらず、個人的なインペアメントを前提にしてディスアビリティを捉えているために、前者のみならず後者をも個人化してしまうという問題をはらんでいるのである。

3.2 アポステリオリなインペアメント

トレメインによるなら、少なくとも初期の社会モデルの議論においては「『インペアメント』という言葉は、歴史も文化も越えた客観的な実体とされている」⁸が(Tremain 2001: 617)、⁸「ディスアビリティの根底にあり、自然なものだと思われているインペアメントはそれ自体、ある主体の自己理解と自己認識に組み込まれ、行政政策や医学・司法的言説あるいは文化的表象などによって作り上げられる、知／権力の産物として同定されるべき」ものなのである(Tremain 2017: 93)。

トレメインは、「インペアメントは、物理的な身体の説明に過ぎ」ないと捉えたオリバーに対し、「インペアメントのある身体」そのものが医学的・臨床的言説によって歴史的に構築されてきたと見る。そのような身体を他とは異なる「異常」なものとして位置づけたのが18世紀の生－権力なのだから(Foucault 1975=1977)、オリバーのように「あたかも『インペアメント』という言葉が価値中立的である、つまり単に記述的であると示唆することは、……単純」なのである(Tremain 2001: 621)。

さらに、トレメインは、少なくとも初期の社会モデルが想定してきた「自然なインペアメント」をめぐる問題は、「自然なセックス」をめぐる問題同様に、「身体的非歴史的・生物学的問題として広く具体的に流通している」とし(Tremain 2001: 623)、この二つは同じように構築されてきたと見る。そこでトレメインは、ジュディス・パトラーのセックス－ジェンダー論を参照している。パトラーによれば、「セックスそのものがジェンダー化されたカテゴリーであり、……そこにセックスとジェンダーの存在論的な区別はない」。また、「『セックス』を考えるためにジェンダーが必要であるからには、セックス／ジェンダーの区別が前提とするのとは違って、『セックス』のカテゴリーがジェ

ンダーよりも先にあるとは考えられない」(Butler 1999: 143)。これを援用するなら、「インペアメントそのものがディスアビリティ化されたカテゴリーであり、……そこにインペアメントとディスアビリティの存在論的な区別はない」し、「両者は区別されておらず、むしろ、インペアメントがディスアビリティになっている」ということになる。それだけではなく、「インペアメントを考えるためにディスアビリティが必要であるからには、インペアメント／ディスアビリティの区別が前提とするのとは異なり、インペアメントのカテゴリーがディスアビリティよりも先にあるとは考えられない」ということになる。言い換えるなら、ディスアビリティがなければインペアメントは問題視されなかったということになるはずである。

そうであるならば、「インペアメントの問題」とされる問題は、ディスアビリティからアポステリオリに派生していることになる。先のシェイクスピアの例示では、歩けないというインペアメントが階段というディスアビリティの前に存在していたが、そうではない。階段が、歩けないというインペアメントを浮かび上がらせ、あたかもそれが特定の人の問題であるように見なされるのは、ディスアビリティが成立した後のことなのである。逆に言うなら、階段しかないという状況(＝ディスアビリティ)でなければ、歩けないこと(＝インペアメント)はインペアメントではないと言えるのである。

これに対して、例えば石川准(2002)はシェイクスピアと同様に、次のように論じている。「ディスアビリティとは、作作的、不作為的な社会の障壁のことであり」、「社会モデルは、……社会が『できない』という問題を解決するための責任と負担を負わない状態を問題にすべきだと主張した」。ところが、石川は、「障害からディスアビリティを差し引いた残りがインペアメントであり」、「ディスアビリティが減少すれば障害のかなりの部分は自ずとたんなる身体にもどっていくという展望に立ってディスアビリティの削減をめざすのが社会モデルである」と述べる(石川2002: 26-28)。よって、石川もインペアメントを身体的かつ個人的なものとして捉えていると言える⁹。

だが、そのような主張をする社会モデル論者は、その内部の違いは別として、インペアメントを障害の問題の本質にはしていないという点は一致しているはずであり、その意図もないはずである。また、ほとんどの論者は、ディスアビリティと切り離してインペアメントを考えることは不可能だと論じるが、インペアメントそのものが問題であるとはしないはずであり、同じくその意図もないはずである。だからこそ、(1)無力化はインペアメントの必然的な結果ではない、(2)インペアメントはディスアビリティの十分な条件ではないと主張してきた(Shakespeare [2006] 2014: 75)。しかし既述したように、トレメインによれば「それにもかかわらず(3)暗黙の裡に、ディスアビリティの必要条件として、インペアメントを前提にしたのである」(Tremain 2001: 630, 2017: 92)。

このように、トレメインの主張の要点は、「『インペアメント』を‘持っている’人々、あるいは‘持っている’と推測される人々だけが『障害者(disabled)』としてカウントされる」(Tremain 2001: 631)事態を重視するということにある。トレメインによるなら、常に既に「インペアメントがディスアビリティになって」いるのであり、「インペアメントは全面的にディスアビリティ」であるからには(Tremain 2001: 632, 2002: 42)、インペアメントをディスアビリティの前提にし、前者が後者に先立つと論じること自体が誤りなのである。「インペアメントは、人間の知性や能力……に関する文化的に特有の規範の反復を通じて、主体の普遍的な属性として具現化される」(Tremain 2001: 632)のである。個人的なインペアメントがそのままディスアビリティだと見なされるというのであれば、当然のことながら、ディスアビリティも個人的なものとして見なされることになる。インペアメントが常に既に個人化されているからには、簡単にインペアメント＝ディスアビリティという等式が成り立ち、インペアメントの個人化を通して、ディスアビリティの個人化を引き起こすのである。

このことから、インペアメントを非歴史的な前提としてディスアビリティを考える社会モデル論は、図らずもインペアメントを問題の隠れた中心に据えてしまっていると言えるのである。

4 批判と応答

4.1 トレメインへの批判

トレメインに対して、主に身体の位置づけをめぐる幾つかの批判が出されている。

例えば、ビル・ヒューズは、トレメインによるミシェル・フーコー的な身体観の援用がインペアメントの社会的

構築という側面を示すことに役立つ点は認めている (Hughes [2005] 2015: 79)。しかし、ヒューズは、これまでフーコーの権力論や主体論に向けられてきた批判を援用して、「権力の標的となる『従順な身体』は、主体としての身体の役割、つまり自己変容および社会変容の行為者としての身体の役割を過小評価している」と批判する (Hughes [2005] 2015: 80-81)。ヒューズによるなら、身体は、権力の対象に還元されたために、その活きた肉體や血が失われて、「物質的な重要性を欠くモノ」とされるようになった (Hughes [2005] 2015: 85)。さらに、身体は受動的なものとして構成され、言説の支配を受けるだけの器とされた。そのために、ヒューズによるなら、フーコーを援用するトレメインのような論者は、障害をもつ人々 (people with impairment) が、従属的な主体だと見なされる状態をどのように乗り越えてきたかという方法については、説明できないのである (Hughes [2005] 2015: 89)。

同じくトービン・シバーズも、生-権力による従順な身体の構築という見方を支持はしている (Siebers 2008: 57-58)。しかし、トレメインの議論では、「異常な身体」は矯正の対象となる根絶すべき悪として表されているだけになっていることを指摘する。ところが、シバーズによるなら、いまでは、多くの人々が障害者の身体 (disabled bodies) を欠陥と呼ぶべきではないと見なしているのである (Siebers 2008: 59)。加えて、シバーズは、「私は、身体が社会的な力とは別に存在している、あるいはそれが文化的なものよりも『本当の』、『自然な』、『確実な』ものを表していると主張するわけではない」が、「身体は第一に、手に負えない力をもつ生物学的因子」とであると強調する (Siebers 2008: 67-68)。シバーズは、言説による身体の構築性を押し出す議論においては、医学的言説に抵抗するような身体の生物学的側面が見落とされることを指摘しているのである。

さらに、ジャッキー・スカリーは、ポストモダニストのアプローチが身体の正常化=標準化に関して批判的な観点をもたらした一方、身体に生物学的な性質が存在するというを完全に不可視化するという問題があると論じる。そして、「身体の記述やその変化を制限するような、解剖学的・生化学的な実際の制約を身体が持っていることを忘れてと……理論を制限するものは何もなくなくなる」と警告する (Scully 2008: 7)。トレメインが採るようなアプローチは、「どこまでも前言説的な、生きている身体を見失わせる認識論的な危険性がある」というのである (Scully 2008: 12)。

上記3名が身体の生物学的側面の重要性を指摘しているのに対し、シェイクスピアはトレメインのような議論には利点もあるが、実践性に欠けるとして、別の角度から次のように述べる。「インペアメントの安定性を突き崩す研究は、結局は反生産的である。インペアメントによって個人は自分の身体や精神の現実の難題を理解するのであるが、そのことを妨げるからである。インペアメントをめぐる診断や定義に挑むことは歓迎してよいが、経験的リサーチに基礎を置いた世界への現実主義的アプローチの方が、政治的にも、個人のレベルでも役に立つと私には思われる」 (Shakespeare [2006] 2014: 71)。シェイクスピアは、インペアメントを取り巻く言説に対する批判的態度に、一定の理解を示しているとも言える。だが、その一方で、インペアメントの経験が個人に与える意味を重視する立場を取る。すなわち、シェイクスピアはインペアメントがそれとして作られる側面もあることを肯定しつつ、インペアメントには身体や精神に関わる何らかの本質性があると捉えていると見ることができるだろう。

4.2 トレメインの応答

トレメインは、スカリーのように身体に関して現象学的な議論を展開する論者について、次のように書いている。「スカリーは……フーコーが現象学を避け、現象学に由来する人間の、具体的かつ活きた経験を否定した」と考えており、「スカリーの所見によれば、ディスアビリティについての言説の表現の標準化と自然化に着目することは、障害学にとっての強力な手段であったが、言説に重きを置きすぎることは問題になる」 (Tremain 2015: 31-32)。しかし、トレメインによるならば、このような批判はフーコーの解釈においても誤っており、「フーコーは身体の実体性や経験を否定したのではない。むしろ、『身体』と具体的な経験——インペアメント、人種、ジェンダー、セックスなど——は、それらを現実にもたらした歴史的に偶発的な慣習から切り離すことができないという点を示すことに関心があった」 (Tremain 2018: 9) とまずは応答する。そして、トレメインは、「身体そのものが、人間に関する歴史的に特定の言説の産物」であり、「障害のある身体 (impaired and disabled body) も、……それを現実にもたらした歴史的に偶発的な慣行から引き離すことは不可能である」とあらためて主張する (Tremain 2015: 33-34)。

シバーズやスカリーが主張するように、身体に生物学的側面があることは誰も否定しないであろう。スカリー

は、「身体は話す前か、それについて話される前にある¹⁰」と主張する (Scully 2008: 12)。しかし、トレメインは、その身体がいかに所与のものとしてきたのかを論じたのであり、「身体の再記述と変化は『前言説的』な物質的制約それ自体によって決定されるわけではない。むしろ、どのような方法で具体的な身体の再記述と変容が起こるかについてさえも、常に身体の歴史的に偶然の概念によって制限されている」のである (Tremain 2015: 34)。つまり、身体は常に既に歴史や言説の影響を受けており、言説より前に物質化されて「ある」ようなものではないのである。

ところで、個人的なインペアメント、あるいはそれに基づく経験に相当するものとして、痛みが挙げられることが多い (例えば、Crow 1996)。シバーズは、痛みがおそらく最も主観的な現象だと述べた上で、次のように指摘している。「痛みの伝達不可能性から導き出された個人性は、各々の苦しみが……孤独のうちに閉じ込められているという感覚によって、誇張された個人性の神話の強制を簡単に行う」(Siebers 2008: 60)。たしかに、個人的なインペアメント、もしくはそれによって生じる痛みや苦しみを、他者へ伝えることはできない。それゆえに、社会モデルの議論でも、そのような個人的経験の重要性が強調されてきた。しかし、そのように経験の個人性を強調すると、その延長上には、「よって、インペアメントのない者には無関係な問題である」という主張が出て来るのである。加えて言うなら、個々の痛みや苦しみを他者と共有することはできないかもしれないが、インペアメントの経験はそれだけに留まるものではない。身体的な苦痛を伴わずとも、例えば僅かな段差によってそれまで意識しなかったインペアメントが立ち現れるということがある。ここで、星加があげる経験を参照するなら、右手の指が欠損している野辺明子の娘は自然に自分の身体を受け入れたが (野辺 2000)、「自分の右手は、周囲の人の『笑いや視線』によって羞恥の対象となった」(星加 2007: 215-216)。この当たり前だと思っていた、指の欠損が障害として意識されることを星加は、「差異/スティグマとしてのインペアメント」と呼んでいる (星加 2007: 217-218)。この時のインペアメントは、社会的な環境によって経験させられているのであり、純粹に身体的・個人的な経験とは言い切れないのである。主観的な苦痛の経験の重要性は否定しないが、それのみがインペアメントというわけではないはずである。また「何かができないという苦痛」が、社会によって経験させられるものであるとするならば、それを「個人の経験」にして済むということでもないはずである。

インペアメントはディスアビリティに先立つものではないという立場を取る星加は、「社会において要求される価値との関連でディスアビリティが生じ、それを個人に帰責するためにある種の機能的特質に対して否定的な価値付けがなされたものがインペアメント」なのだと言っている (星加 2007: 108)。この主張にしたがえば、インペアメントはディスアビリティとの関係によって個人的なものにされるのであって、初めからそれが個人的なものであったわけではない。このことから「インペアメントは個人的な経験である」という主張の強い押し出しは、シバーズに倣うならば、誇張された個人性の神話の強制に繋がると言える。

インペアメントの経験が個人的なものであるという議論は否定しない。だが、それにもかかわらず、筆者がインペアメントの個人化の回避を主張するのは、それがあつた種の自己責任論と結びつくことを危惧するからである¹¹。先天的なものであれ、事後的なものであれ、何らかのインペアメントが個人の責任にされる理由はない。たとえ、それが生じた原因が個人にあったとしても、それゆえ責任を負わねばならないということにはならない。さらにインペアメントそのものは、否定的な意味を持ってはいない¹²。その意味を持たせるのは規範の自己内面化も含めて、社会である。だが、それがあたかも個人の責任であるかのように、転嫁されているのが現実である。そして、そのような誇張された個人性の神話なるものは、自己責任論にすり替わる可能性を含んでいるのである。

5 結語

本稿では、最初に、インペアメントがディスアビリティに先行するというUPIAS、オリバー、シェイクスピアそれぞれの議論を概観した。インペアメントを身体的なものとするか、あるいはそれが社会的に構築される面もあると捉えるかという違いはあるが、三者の共通点は、「インペアメントはディスアビリティの必要条件である」とすることである。別の言い方をすれば、これら三者は、「インペアメントがなければディスアビリティを経験することはない」という認識を持っている。

これに対して、インペアメントはディスアビリティに先行するものではないという主張をするのがトレメインで

ある。オリバーらの、インペアメントをディスアビリティの必要条件とする議論は、インペアメントそのものがディスアビリティになるだけでなく、その両方を個人化するのである。なぜなら、既述の通り「主体の普遍的な属性として具現化され」たインペアメントの個人化によって、ディスアビリティの個人化が起こるからである。トレメインの論調は言説を重視しており、身体の生物学的側面やインペアメントを軽視しているという批判がなされている。だが、身体そのものが言説によって物質化され、構築されているとの主張は、それらの重要性の否定ではないのである。

トレメインのような議論が言説の力を過大視しているという指摘は誤りではないだろう。仮に「障害の社会モデルは理論や考え方、あるいは概念ではなく、実用的な道具であると主張」するオリバーを踏襲するのであれば (Oliver 2004: 11)、トレメインのような議論は実践的ではないのかもしれない。しかし、トレメインが過小評価しているとされる「自己変容および社会変容の行為者としての身体の役割」が何を指すのか、ヒューズなどの論者はそれほど明らかにしていないのである。

トレメインは、障害者の身体やインペアメントが個人的な、あるいは異常なものとして構築される際にいかなる力学が働いているのかという点を明らかにしてきた。また、その力学と社会モデルがどのような関係にあるのかということも論じてきた。社会モデルが現行の社会を変えていくための道具であったり、身体に社会変容の行為者としての役割があったりしても、現在の状態を招いた背景やメカニズムを理解しなければ、それを変えるための思考方法さえも分からないのではないのか。

しかも、障害者の無力化とインペアメントとの因果関係を断ったのが社会モデルだとすると、インペアメントを前提にせず「特定の人々が無力化される原因」を提示するトレメインの方が、より「社会モデル的な」議論だと言えるはずである。たしかに、星加がインペアメントをディスアビリティの前提にしないという点は、トレメインと共通する。しかし、星加はインペアメントがディスアビリティになることもあるという立場を取り、「インペアメントが否定的に意味付けられる際には、それが他者のサンクションや『自己否定』のメカニズムを介して不利益を産出し、ディスアビリティの生成に関与する」(星加 2007: 312)と主張している。これは、先述の指の欠損というインペアメントがディスアビリティになる／されることを表していると言える。したがって、インペアメントをディスアビリティの必要条件とはしていなくても、個人のレベルで「インペアメント＝ディスアビリティ」だと捉える側面がある星加の議論は、トレメインというよりもむしろ、シェイクスピアに近いのではないかと筆者は考える。

「ディスアビリティを個人の責任にするためのインペアメント」という星加の認識を踏襲すれば、ディスアビリティはインペアメントのある人の問題ではなくなり、それを個人の責任としてきた社会の問題へと拡張することが可能である。また、同様のことはインペアメントについても言えよう。各々の経験が個人的なものであると強調することと、社会が個々人のインペアメントを問題視してきたことを問い返すことは、別のことである。それが、「障害の社会化」を通して、社会モデルが狙ってきたことであるはずである。したがって、トレメインの議論は問題解決の実践に直ちに使用できるものではないかもしれないが、「障害の問題を社会化する」という点において意義があると考えられる。よって、インペアメントを前提にディスアビリティを考える議論よりもトレメインの議論の方が、社会モデルの考え方にふさわしいものであると言えるだろう。

障害の個人化そのものを問題として主題にするためには、社会モデルをその観点からあらためて評価し直す必要がある。しかし、それは本稿とは別の論文で行われるべきだと考えるため、今後の課題とする。

注

- 1 アレンはインペアメントを規範からの逸脱と捉える知の産物だと言う (Allen [2005] 2015: 94)。この考え方は、トレメインに類似している。
- 2 星加は別の書 (2013) で、社会モデルの理解が矮小化されていることや、その内在的な限界について検討している。また、榊原賢二郎 (2016) は社会モデルを基礎に置きつつ、社会的包摂／排除と身体という別の側面から障害を考察している。
- 3 日本の障害学研究ではほとんど言及されないが、英語圏では批判的な社会モデル論が展開される際に、トレメインの主張は参照され論じられている。

- 4 オリバーは「障害の基本原理」に影響を受け、「障害の社会モデル (social model of disability)」という言葉を作り出した人物としても知られる (Oliver 1983)。
- 5 オリバーは脊髄損傷による車椅子ユーザーのため (Oliver 1996: 8)、ここには彼自身も含んでいると考えられる。またインペアメントとディスアビリティを区別し、後者の重要性をより強調するオリバー的な立場を支持するものとして、ほかに座主果林 (2008) が挙げられる。
- 6 トレメインと文脈は全く異なるが、シェイクスピアも同様の指摘をしている (Shakespeare [2006] 2014: 75)。英国で社会モデルの議論がされ始めた当時、シェイクスピアはそれを擁護する立場を取り「障害者運動の到達点は、われわれの身体と社会状況の因果関係を断ち、ディスアビリティの本当の原因である差別や偏見に目を向けたことである。生物学に言及し、痛みを認め、インペアメントを直視することは、結局ディスアビリティとは『本当は』身体的制約のことだ」という根拠に、抑圧者が飛びつく危険性がある」と述べていた (Shakespeare 1992: 40)。しかし少なくとも 2000 年代初めには、社会的抑圧をディスアビリティと見る社会モデルでは、インペアメントに対する医学的介入等の考察ができないことや、インペアメント／ディスアビリティの明確な区別の不可能性を挙げ、社会モデルを批判するようになった。
- 7 これはモリスやクロウに限らず、オリバーとバーンズも同様に認めている (Oliver and Barnes 2012: 22)。しかし、インペアメントに関する社会モデルの論争は「議論の射程の問題に回収され、実りあるものとはなっていない」とおらず、「インペアメントとディスアビリティとの関連の仕方についての議論は十分に展開されて」いないという指摘がある (星加 2007: 67)。これはやはり、社会モデル論がインペアメントを軽視してきたということであろう。それに対し、トレメインとそれに対する批判的な議論は、インペアメントを議論の射程の問題とはせず、それとディスアビリティとの関連の仕方を論じている点で有意義だと考える。
- 8 トレメイン自身は、2001 年の論文について、「インペアメントが人工物であり、それが文化的にも歴史的にも明確に、ディスアビリティであることを論じた」としている (Tremain 2017: 81-82)。そして、「この論文の発表以来、……私の考え方が批判的に参照された」(Tremain 2017: 82) と述べることから、2001 年の論文がトレメインの研究における一つの分岐点であり、重要な位置を占めると言える。
- 9 社会モデルの論者のうちでもインペアメントについては、医学モデル的な解釈をしていることが多い (例えば Hayes and Hannold 2007)。
- 10 原文はイタリック。
- 11 病人役割を障害者役割に適用させることが可能 (堀 2011) だとして、身体上の問題が免責の理由にされる可能性もある。だが、病人役割には「それ自体望ましくないものとしての病気の状態」を受け入れる義務がある (Parsons 1951 = 1974: 433)。それに対して、インペアメントは「それ自体望ましくないもの」ではないはずなので、この義務を条件にするような免責は不適当だと言える。
- 12 例えば UPIAS (1976) では欠損や機能の欠陥と定義されているが、それらが否定されるべきものであるとは書かれていなかった。

参考文献

- Allen, B., 1999, "Disabling Knowledge," G. B. Madison and M. Fairbairn eds., *The Ethics of Postmodernity: Current Trends in Continental Thought*, Evanston, Illinois: Northwestern University Press, 89-103.
- , [2005] 2015, "Foucault's Nominalism," S. Tremain ed., *Foucault and Government of Disability*, 2nd ed. Michigan: University of Michigan Press, 93-107.
- Butler, J., 1999, *Gender Trouble: 10th Anniversary Edition*, London and New York: Routledge.
- Crow, L., 1996, "Including All of Our Lives: Renewing the Social Model of Disability", Barnes, C. and Mercer, G. eds., *Exploring the Divide*, Leeds: Disability Press, (2017 年 7 月 3 日取得, <http://pf7d7vi404s1dxdh27mla5569.wpengine.netdna-cdn.com/files/library/Crow-exploring-the-divide-ch4.pdf>). <http://disability-studies.leeds.ac.uk/wp-content/uploads/sites/40/library/Crow-exploring-the-divide-ch4.pdf>
- Foucault, M., 1975, *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, Paris: Gallimard. (= 1977, 田村俣訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社.)
- Hayes, J. and E. M. Hannold, 2007, "The Road to Empowerment: A Historical Perspective on the Medicalization of Disability," *Journal of Health and Human Services Administration*, 30 (3): 352-377.
- Hughes, B., [2005] 2015, "What Can a Foucauldian Analysis Contribute to Disability Theory?," S. Tremain ed., *Foucault and Government of Disability*, 2nd ed., Michigan: University of Michigan Press, 78-92.
- 星加良司, 2007, 『障害とは何か——ディスアビリティの社会理論に向けて』生活書院.
- , 2013, 「社会モデルの分岐点——実践性は諸刃の剣?」川越敏司、川島聡、星加良司編, 2013, 『障害学のリハビリテーション——障害の社会モデルその射程と限界』生活書院, 20-40.

- 堀智久, 2011, 「専門性の解体とその隘路——日本臨床心理学会の1970 / 80」2011年度障害学会第8回大会ポスター報告, 報告要旨, (2018年9月29日取得, <http://www.jsds.org/jsds2011/jsds2011-home.html#3>).
- 石川准, 2002, 「ディスアビリティの削減、インペアメントの変換」石川准・倉本智明編『障害学の主張』明石書店, 17-46.
- Morris, J., 1991, *Pride Against Prejudice*, London: Women's Press.
- 野辺明子, 2000, 「障害をもついのちのムーブメント」栗原彬、小森陽一、佐藤学、吉見俊哉編『語り：つむぎだす（越境する知（2））』東京大学出版会, 105-129.
- Oliver, M., 1983, *Social Work with Disabled People*, London: Macmillan.
- , 1996, *Understanding Disability: From Theory to Practice*, Basingstoke: Macmillan.
- , 1999, "Capitalism, Disability and Ideology: A Materialist Critique of the Normalization Principle," F. Robert J. and B. A. Lemay, *A Quarter-Century of Normalization and Social Role Valorization: Evolution and Impact*, (2017年7月8日取得, <https://www.independentliving.org/docs3/oliver99.pdf>).
- , 2004, "If I Had a Hammer: The Social Model in Action," J. Sawin, S. French, C. Barnes and C. Thomas eds., *Disabling Barriers, Enabling Environments*, 2nd ed., London: Sage, 7-12.
- , 2009, *Understanding Disability: From Theory to Practice*, 2nd ed., Basingstoke: Macmillan.
- Oliver, M. and C. Barnes, 2012, *The New Politics of Disablement*, 2nd ed., Basingstoke: Macmillan.
- Parsons, T., 1951, *The Social System*, Glencoe: The Free Press. (= 1974, 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店.)
- 榎原賢二郎, 2016, 『社会的包摂と身体——障害者差別禁止法制定後の障害定義と異別処遇を巡って』生活書院.
- Scully, J. L., 2008, *Disability Bioethics: Moral Bodies, Moral Difference*, Maryland: Rowman & Littlefield.
- Shakespeare, T., 1992, "A Response to Liz Crow," *Coalition*, September 1992: 40-42.
- , 2004, "Social Model of Disability and Other Life Strategies," *Scandinavian Journal of Disability Research*, 6 (1): 8-21.
- , [2006] 2014, *Disability Right and Wrong Revisited*, 2nd ed., London and New York: Routledge.
- Shakespeare, T. and N. Watson, 2001, "The Social Model of Disability: An Outdated Ideology?," (2018年6月28日取得, <https://disability-studies.leeds.ac.uk/wp-content/uploads/sites/40/library/Shakespeare-social-model-of-disability.pdf>).
- Siebers, T., 2008, *Disability Theory*, Michigan: University of Michigan Press.
- 立岩真也, 2017, 「星加良司『障害とは何か』の1」『現代思想』45 (22): 22-33.
- Tremain, S., 2001, "On the Government of Disability," *Social Theory and Practice*, 27 (4): 617-636.
- , 2002, "On the Subject of Impairment," M. Coker and T. Shakespeare eds., *Disability/Postmodernity: Embodying Disability Theory*, London and New York: Continuum, 32-47.
- , 2015, "This Is What a Historicist and Relativist Feminist Philosophy of Disability Looks Like," *Foucault Studies*, 19: 7-42.
- , 2017, *Foucault and Feminist Philosophy of Disability*, Michigan: University of Michigan Press.
- , 2018, "Feminist Philosophy of Disability: A Genealogical Intervention," Unpublished Author's Copy.
- UPIAS, 1976, *Fundamental Principles of Disability*, London: Union of Physically Impaired Against Segregation, (2016年6月7日取得, <https://disability-studies.leeds.ac.uk/wp-content/uploads/sites/40/library/UPIAS-fundamental-principles.pdf>).
- Williams, S. J., 1999, "Is Anybody There?: Critical Realism, Chronic Illness and the Disability Debate," *Sociology of Health and Illness*, 21 (6): 797-819.
- 座主果林, 2008, 「障害の『社会モデル』——『社会モデル』の意義と障害者の経験の記述における限界」『奈良女子大学社会学論集』15: 99-112.

The Argument on Individualization of Impairment and Disability

KITAJIMA Kanako

Abstract:

In the British Social Model of Disability, some consider that disability is something imposed on top of the impairments, and others disagree with such view. This paper criticises the former and reviews this controversy by focusing on Tremain's argument of impairment. UPIAS (the Union of the Physically Impaired Against Segregation), Oliver, and Shakespeare, who view disability is something imposed on top of the impairments, consider impairments as the necessary condition of disability. I argue this view has a problem of individualizing both impairment and disability. Meanwhile, Tremain's argument is criticized on its position of the body and personal experience of impairment. However, if the social model of disability denies the causal link between disablement of the disabled people and their impairment, Tremain's argument is more suitable for the social model because she presents reasons that specific people are disabled without having their impairment as its necessary condition.

Keywords: social model of disability, impairment, disability, individualization

インペアメントがディスアビリティに先行するのか ——インペアメントとディスアビリティの個人化をめぐる——

北 島 加奈子

要旨:

英国の障害の社会モデルの議論では、インペアメントがディスアビリティに先行するという主張と、先行しないという主張がある。本稿は後者の立場から、前者の主張がインペアメントとディスアビリティを個人化していることを指摘し、先行しないと論じるトレメインの主張の妥当性を明らかにする。インペアメントがディスアビリティに先行すると論じるUPIAS、オリバー、シェイクスピアは、それをディスアビリティの必要条件だと見る。そう捉えることで三者の議論には、インペアメントとディスアビリティの両方を個人化してしまうという問題がある。一方、先行しないと主張するトレメインの議論には、主に身体とインペアメントの個人的経験の位置づけをめぐる批判がある。だが、社会モデルが障害者の無力化とインペアメントとの因果関係を断ったとするなら、インペアメントを前提とせずに、特定の人々が無力化される原因を提示する彼女の議論の方が適している。